

[講演要旨] 1707年宝永地震の余震被害について

(株)防災情報サービス* 中村 操

(公財)地震予知総合研究振興会† 松浦 律子

§1. はじめに

宝永四年十月四日(1707/10/28)未刻(13:30 ごろ)に宝永地震(M 8.6)が発生し、その翌日の早朝つまり十月五日(1707/10/29)卯刻(05:40 ごろ)に余震が起きた。さらに、十一月二十三日(1707/12/16)には富士山が噴火し、宝永火口を作った。

余震に関する史料を追加整理し、被害記事から震度分布図を作成した。また震源についても考察を行う。

§2. 各地の有感および被害史料

2.1 東京都・神奈川県の記事

千代田区の成満寺では「五日、明六ツ過大地震、昨日之程也、早速登城、護持院は不被罷出」(成満院日記抄)。また、柳沢家「四日 今日八つ時地震強し、五日今朝六つ時過に地震強きによりて登城して、御機嫌を窺ふ」(楽只堂年録)。千代田区「四日昼八比地震 先年已後ノ強キ地震也、同五日明六過地震四日地震ヨリ過半よわし」(河方筆記)、また台東区「五日、卯ノ上刻地震、昨日程に無之候共、よほどふれ候」(岡本元朝日記)とあり、余震は本震より弱かったことがわかる。

小田原市・箱根町「去ル四日之地震、小田原よほど強有之、戸はめ(ねか)、地も割候程ニ候、(中略)五日朝之地震ハ箱根強候由也」(岡本元朝日記)。

2.2 静岡・山梨県の記事

三島代官所「昨四日未之刻、豆芡大地震仕候、(中略)三嶋町・箱根町潰家は無御座候、相改可申上候、又々今朝卯之上刻大地震仕候、鎮申候故潰家は無御座候」(楽只堂年録)

富士市岩本「岩本村、家数百九拾五軒、内崩家百四拾五軒、半崩家五拾軒、同岩淵「家数弍百参拾参軒大破」(真田家文書)とある。富士宮市村山、本宮浅間大社「□分に夥敷大地震、昨夜之三双倍(中略)神社佛閣震ひ傾け、村家の居屋□れ潰る事数多也」(大地震富士山焼出之事)

静岡市葵区駿府公園、駿府城「十月四日未刻大地震、同五日申刻大地震、両度之地震ニ而御城中所々大破損」(駿国雑誌)

南アルプス市荊沢「荊沢十五ヶ村残潰レ、五日朝

茂潰レ候程震」(市川文蔵家文書)。

§3. 宝永地震と余震との被害の分離

宝永地震本震と余震は時間差無く発生したため、被害を分離することは史料からでは無理である。そこで、宝永地震と 1854 年安政東海地震の被害を三島町や駿府で比較することにより分けることにした。

安政東海地震では駿河湾奥の多くの宿場や箱根で震度 6 以上であった。宝永地震では三島、箱根は潰れる程ではなく震度 5。従って、富士市、富士宮市の倒潰被害は余震によるものと判断し、震度 6 程度と推定した。図 1 に余震の震度を示す。

§4. 震源および規模について

震源は震度分布及び村山浅間神社の被害から、富士宮市付近から富士山中腹であり、深さは浅い。規模については江戸での震度 3.5~4、箱根や荊沢の 5.0 を説明するためには M 6.6~6.8 と考える。

因みに 2011 年 3 月静岡県東部の地震(M6.4)では、千代田区周辺では震度 2.5 程度であった。

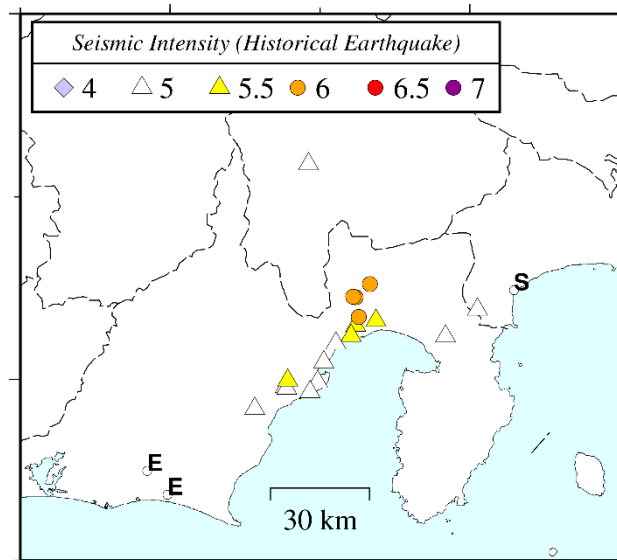


図 1 宝永地震の余震の震度分布。

謝辞 北原糸子氏、静岡芸術文化大学・磯田道史教授そして新潟大学・矢田俊文教授には史料およびコメントをいただきました。お礼を申し上げます。

* 〒285-0038 千葉県佐倉市弥勒町 230-7

電子メール: misao @ ba2.so-net.ne.jp